

# 玩具にみる日本の近代——関東大震災から満州国承認まで

文  
是澤博昭

PROJECT

共同研究 ● モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究  
——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に（2014-2017年度）

## 近代史の裏面

国立民族学博物館（以下、民博）所蔵の子どもの生活文化に関するコレクション（通称「時代玩具」、大阪府指定有形民俗文化財）は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わるモノが、網羅的に収集・保存されたきわめて貴重な資料だ。

本プロジェクトは、総数5万数千点に及ぶそれらの膨大な資料群を総合的に検討することで、近代日本の子どもの社会と文化の形成過程を、モノをとおして解明する試みである。それとともに文献資料にはあらわれない近代日本をさぐる手がかりを探り当てることも視野に入れている。

昨年度は民博資料の熟覧を中心に、全国各地に存在する類似のコレクションの調査を含めて研究会を開催した。そこで明らかになったのは、民博のコレクションが子どもの生活の解明にとどまらない、近代史の裏面にせまる資料になり得る可能性を秘めていることであった。ここでは関東大震災から満州事変という、日本近代史の分岐点となる出来事についてみてみよう。

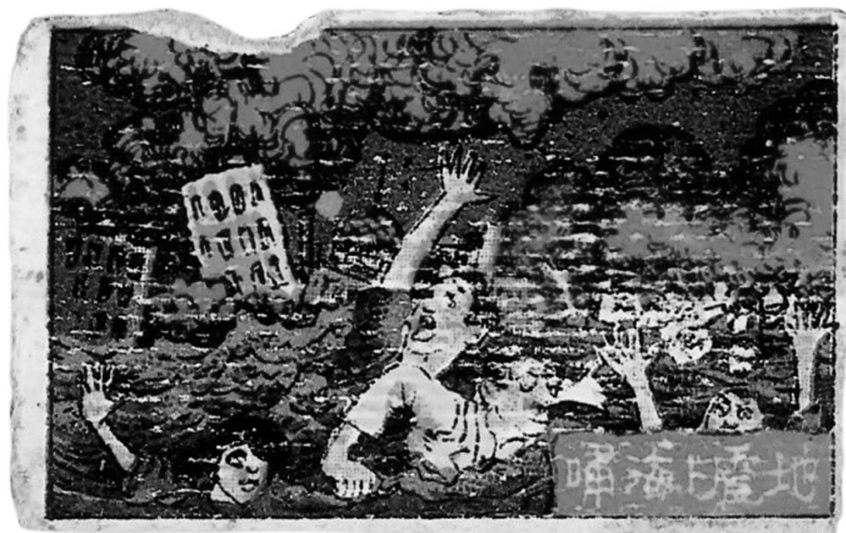


写真1 「関東大震災めんこ」1920年代（『おもちゃ博物館』第23巻、45頁より）。

## 吉田伊三郎関係文書

コレクションには、外交官として国際連盟の日本代表や中国で山東問題の解決に尽力した吉田伊三郎関係文書など、政治・外交史に関係するものも含まれている。

1930年9月、トルコ大使であった吉田が宮中に玩具を献上した際の受取状は興味深い。外交官が海外出張の折りに、玩具を皇女などの土産にしたこともあったようだ。満州事変の調査に派遣されたリットン調査団に、吉田は日本側の参与員として随行し、満州・中国各地を視察したことはよく知られている。犬養首相によって官邸で開かれた同視察団への晩餐会招待状と食事のメニュー、奈良市長宛のリットンの礼状の封筒と名刺、国際連盟で発表する日本政府の意見書をスイスの松岡洋右に持参するにあたり、吉田に天皇への奏上を命じた書状とパスポート、日本代表団宿泊ホテル給菓書など、これらの資料は当時の状況を伝えている。

さらに渡欧中の画家竹久夢二が、ジュネーブでの国際連盟の会議を傍聴してスケッチしたリットンや顧維鈞（中華民国代表）の似顔絵、2人の姿を中心にした会議風景を図案化し

たメンコなど、いずれも近代史に新たな発見をもたらすものではないが、日本が国際連盟を脱退し、孤立化の途にふみだす時代の雰囲気に触れるものだ。

## 関東大震災とメンコ

1923年9月1日、日本の中枢部に壊滅的な打撃を与えた関東大震災がおこる。被害は地盤の弱い東京湾沿いの埋め立て地で大きく、特に本所横網町の陸軍被服廠跡地では、火の粉が降りそそぐ中、家財をかかえて避難してきた人々を突風が襲い、人や荷物が火に包まれ阿鼻叫喚の地獄になった。横浜市が発行した罹災者7名用の乗車券は、市役所の用紙を切り取り手書きにして役所印を押したものだ。品川駅発行のそれ

を含めて、当時の混乱した状況を、この急ごしらえの乗車券が物語っている。

さらに子どもとの関わりで別の資料をみてみよう。同年11月から新聞に連載された漫画「ノンキナトウサン」は、人形をはじめ多数の関連商品が発売され、映画化されるなど大きな反響を呼ぶが、これが当時の暗い世相を明るくしたい、という意図ではじまったことはあま

り知られていない。「ノンキナトウサン」を題材としたカルタや双六には、主人公が地震で罹災した様子が描かれている。

本資料群で注目されるのが、火災につつまれ倒壊したビルを背景に、水の中を人々が逃げ惑う姿が、メンコになり一般に販売されていることだ（写真1）。深刻で残酷な災害被害の様子など、子どもの目から極力遠ざけようとする現代とは異なる感覚が、ここには映しだされている。

## 日満親善と子ども

その9年後、満州国建国宣言から承認までの日本国内の排外熱が一段落した時期に唱えられたのが、アジアの融和と平和であった。そこで、大人社会の血を血で洗うような国際紛争の負のイメージを浄化させる戦略の柱として、子どもが大きな役割を果たす。

たとえば、満州事変をきっかけに軍部への批判的な態度から方針を転換した大阪朝日新聞社は、総力をあげて同事変支持のキャンペーンを展開するが、ここでも積極的に子どもを

活用している。1932年3月満州国建国にともない、同国の承認の機運を盛り上げるために満州国から日本へ少女使節が派遣され、それに答えて民間の小学校教員団体と大阪毎日新聞、東京日日新聞社の共催で、小学生による日本学童使節が結成される。

後者の派遣日程は、満州事変1周年と満州国承認に重なり、その関連イベントとしての要素を強め、新聞・ラジオ報道を過熱させる。しかも学童使節は権力やマスコミなどからの強制ではなく、下からの自発的な計画を発端としていた。それをマスコミが後押しして、政府が協力し、さらに大衆が支持することで、予想以上の相乗効果をうみだしたのだ。すなわち子どもによる日満親善は、大衆意識を国家戦略へと誘うイベントにまで成長し、国民的レベルで注目を集めるのである(是澤2016)。



写真2 「日満交驛大双六」1933年1月1日、新愛知新聞社発行。  
上がりのコマには執政溥儀も描かれている(民博所蔵)。

### 日満交驛大双六

そこで目をひくのが、その翌年正月の新愛知新聞社(中日新聞の前身)新春付録「日満交驛大双六」だ(写真2)。新聞紙2頁の大きさで、名古屋をふりだしに、当時日本統治下にあった京城(現ソウル)、大連、そして奉天など満州国の各都市を経て、「上がり」のコマは武藤信義と鄭孝胥による日満議定書調印の写真を模写している。

題字の4面は日満両国旗に囲まれ、その両端は日本と満州の子どもがそれぞれの国旗を手にしている。子どもたちの背後にある東京と新京が上がりにつながるコマで、いずれも「1」をふれば上がりだ。

この双六の宣伝ポスターは、中国服の子どもが万歳をしている姿で、ここでも子どもが両国の友好と平和に使用されている(写真3)。



写真3 「日満交驛大双六」ポスター。  
月極の購買者に無料で贈呈された(民博所蔵)。

### 平和・友好のシンボル—子ども観の大衆化

1920～30年代前半にかけての文化の特色は、大衆文化の発展とされる。1920年前後から雑誌『赤い鳥』に代表されるように、純粋・無垢な存在というロマン主義的な子ども観がみだされ、過剰なまでに子どもが賛美される。そして新聞・雑誌が日常的な消費財となり、新入学、七五三などの消費イベントや子ども用品の流行操作も本格化する(神野2015)。

1930年代に入ると、子どもは、満州国建国の正当性に国民の関心を集める手段、そして部数拡大を視野に入れた新聞社などのキャンペーンに多用される。純粋で守られるべき子ども・穢れなき子ども(いわゆる「近代的子ども観」)は、平和友好という語に結びつき、世間の共感と関心をひきやすいテーマとなっていたのだ(是澤2015)。

双六やメンコの図柄に、勇ましい軍人の姿、軍人を慕う無邪気な子どもの姿が用いられても、殺戮や人々の命を奪う悲惨な場面は、勇壮・悲壮感に隠されて子どもから遠ざけられている。近代日本の子ども観は、満州事変からはじまる、いわゆる15年戦争を進める大人社会の謀略を覆い隠すイメージの中で大衆化したことも、目をそむけてはならない事実なのかもしれない。

### 【参考文献】

- 神野由紀 2015『百貨店で「趣味」を買う—大衆消費文化の近代』吉川弘文館。
- 是澤博昭 2015「満州国建国と子供・少女と乙女の役割—満州国少女使節と協和会女性使節を中心に」『淡沢研究』第27号。
- 是澤博昭 2016「満州国承認と日本学童使節—小学生による日満親善の試み」『国立歴史民俗博物館研究報告』第201集。

### これさわひろあき

大妻女子大学准教授。専門は児童文化史、主に子どもに関わる生活文化・節句行事などの研究。著書に『教育玩具の近代』(世織書房2009年)、『青い目の人形と近代日本』(世織書房2011年)、『決定版日本の雛人形』(淡交社2013年)他。各地の人形玩具関連の展示会の監修指導のかたわら、近年は祭礼に使用される山車人形の調査などにも従事。